

15.本院において、長期にわたって定期口腔管理を行なってきた患児の推移について

○麻生郁子、浦山静江、小川亜希子、中尾哲之  
なかお小児歯科医院（福岡市）

小児歯科臨床では、本来、健全な永久歯咬合を完成させるために、定期的な予防管理を行っていくことが、重要な因子であると考えられる。今回本院において、定期診査（以後定診と略す）を長期間継続して受けている患児が、定診の回数を重ねるにつれ、どのような変化が認められるかについて調査を行った。調査項目は、新生う蝕歯数、C A T 値、ブラーク・スコア値である。対象は平成5年1月～6月に定診で来院した患児（447名）のうち、連続4年以上継続して受けている患児（87名）である。対象患児の初診時年齢は、3才未満が58.5%を占めていて、平均年齢は3才1ヶ月であった。また、最新定診における年齢の平均は9才2ヶ月であった。定診の受診回数は平均14.6回で、年齢が増すとともに患児数は減少していく傾向を示した。対象患児の初診時、1人平均う蝕歯数は5.5本で、未処置う蝕歯数は1人平均4.7本であった。定診1回当たり、患児1人の2次う蝕を含む平均新生う蝕歯数は、0.8本で、新生う蝕歯数は少ないという結果を得た。C A T 値は初診時には平均1.22であったが、最新定診時平均1.18であった。定診1回当たりの1人平均C A T 値の、定診の受診回数の経過による推移は、1～1.5の間にあって、あまり、変動は見られなかった。ブラーク・スコア値については、本院独自の調査方法ではあるが、初回から定診6回くらいまでは減少傾向を示したが、7回以降漸次増加傾向を示した。調査では、4年以上という長期の継続受診のため、ブラーク・スコア値、う蝕感受性等に関して良好な結果が予測出来るが、実際には、必ずしもそうでないことが分った。特に、保護者及び患児本人への口腔衛生指導の難しさが、浮き彫りの結果となつた。その調査結果及び改善策について検討したので報告する。